

福地桜痴の「文学」観成立の背景

——父苟庵の教えと交友関係——

丹羽 みさと

福地桜痴（源一郎）の「文学」観に関する従来の研究では、まず、世間一般を啓蒙するため、難解な表現を廃した「達意」の文章を志向したとされている^①。桜痴と親しく接していた塚原靖（洪柿園）も、「文章の極意は辞達而已矣！此が開権顕実の一乘法だと文章論の終局には何時も必らず言はれました^②」と証言している。また、坂本多加雄は、桜痴が父苟庵の「源一郎、乃父に代りて有用の人となれ。是れ我志なり^③」という遺志を基軸に、桜痴の「文学」観を論述している^④。坂本は、それまで政治的に「有用の人」であろうとした桜痴が、静岡藩や新政府からの出仕に応じず、「御用無し」の状態であったことが、文芸に関わる転換期になったとする。そして政界から離れ、社会的に「無用」の存在であることを象徴的に確認していく中で、戯作者達と交流を持った桜痴は、「達意」を尊び過剰な修辭を廃した戯作こそが、「一般民衆に向けた啓蒙」活動を行うために「有用」なツールであると認識したと論じている。

坂本論文では、主に職業意識に重点を置いた考察となっているが、本論では、「有用の人」という概念を文学界に移入した桜痴の思想的背景について、これまで俎上に載ることのなかった苟庵の教訓に注目し、それが如何に強く桜痴の「文学」観に作用していたのかを述べていきたい。

また、坂本は山々亭有人、後の條野探菊ら『江湖新聞』の関係者のみを桜痴と交流のあった戯作者として取り上げているが、その他、仮名垣魯文の影響も併せて、彼の「文学」観の成立背景について記していく。

1 父苟庵の教訓とその記録

桜痴は福地苟庵（源輔、別号石橋、魯庵、浄慶）が四十六歳の時に生まれた八番目の子であり、待望の男子であった^⑤。苟庵は、桜痴が十歳になる頃から、和学や漢学に関する見解、諸本に見る海外事情、巷説の真偽や地元長崎のことなど、多岐にわたる事柄を教え、桜痴に筆録させていた。それは桜痴が安政三年十二月から安政五年七月まで、阿蘭陀通辞名村八右衛門の養子となっていた間も途絶えることなく、同年十二月に桜痴が上京するまで続いた。更に、その後も苟庵は、文久元年に桜痴が通弁方として渡欧するまで、様々な助言、忠告をしたためた書簡を送っている^⑥。仕官を企図した上京であったことから、書簡には立身出世のための助言が多く見られる。渡欧が決定した桜痴を言祝ぎ、漢詩文を記していた苟庵であったが、桜痴の帰国を見ることなく、文久二年五月七日に没した^⑧。

苟庵の言葉を、桜痴は折に触れて述懐し、苟庵の事跡に関する「石橋先生伝」（『東京日日新聞』明治十七年六月二十八・三十日）や、上京の際の伝手に関する「懷往事談」第五回（『国民之友』明治二十六年三月）等を記している。また『桜痴集』第二卷（春陽堂 明治四十四年）の巻頭には、桜痴が書き写した苟庵の面讃が影印掲載されている。桜痴が自分の詩文ではなく、苟庵の作を掲載したことに、父への追慕の念を見る

こともできよう。なお、苟庵は頼山陽や篠崎小竹に学び、長崎で市井の儒医としての活躍していた。苟庵の漢詩文は、自筆稿本『茂園詩草』（早稲田大学図書館）などに残されており、山田梅村『吾愛吾廬詩』巻五慶応二年）にも、安政四年に長崎を訪れた際、「福地石橋」や、篠崎小竹門下と旧交を温めたことが記されている。

桜痴に「有用の人」となつて欲しいと願う苟庵の家庭教育、および「文学」観が如何なるものであったのかは、苟庵の聞書によつて知ることができる。嘉永三年から安政五年までに記された桜痴の自筆稿本は、『耳食録』『聞記』『統閣記』『星泓雜著』の現存が確認されている。この他、所在不明の『邇言録』『枇糠録』『省記』を加えると、成立順序は次のようになる。

『耳食録』四卷四冊 嘉永三年筆（桜痴十歳） 日本近代文学館蔵
『邇言録』『枇糠録』所在不明 嘉永四・五年のものか。『聞記』序文より推定

『聞記』四卷四冊 嘉永六年筆（桜痴十三歳） 国文学研究資料館蔵
『統閣記』二卷二冊（巻三・四） 嘉永七年筆（桜痴十四歳） 東北大学図書館蔵

『省記』所在不明 安政二年以降のものか。『星泓雜著』記事より推定

『星泓雜著』一卷一冊 安政三・五年筆（桜痴十六・十八歳） 早稲田大学図書館蔵

『邇言録』『枇糠録』『省記』は、それぞれ他の聞書に書名が記されている。『邇言録』『枇糠録』については、竹院散人（長川東洲）による『聞記』巻一の序文等で確認できる。

題福地尚甫所纂録聞記首

是石橋老人唾餘作、其兒尚甫拾収者、文漫而事大者為邇言録、枇糠

録諸書。余曩者既叙之。文俚而事瑣者為聞記。又請余題一言。夫聞記猶曰庭訓云爾。是庭闈之言、勿論其瑣与俚、所以教諭尚甫之意。可謂其仁如天、其慈如雲。為仙舟者宜重之如鼎呂、尊於聖經賢伝。何則言皆出於宇宙間有一無二之人口、為其所耳提面命。雖曰福地氏第一靈宝可也。夫得賢如石橋而父之、人子之不得皆然。若夫聖賢、群衆而皆私淑之。賢父者尚甫所独也。雖然、仙舟才大、吾雖不言自当知此般道理。而余猶嗷々弗己、豈不大愚哉。

嘉永六年癸丑荷花蕩前数日竹院散人録于慈鴉小館在廂

「石橋老人（苟庵）の話」をその子、尚甫（桜痴）が編纂したものが『邇言録』『枇糠録』などであり、私はこれらの叙を既に記した。『聞記』の題名は、家庭教育の意味である。桜痴に対する教訓は、父ならではないものであり、本書は福地家の家宝とすべきものである。苟庵のような父親を持った桜痴は幸せである。」

桜痴の師である東洲に依頼した序文には、「文漫而事大者」「文俚而事瑣者」とあり、『邇言録』『枇糠録』が『聞記』の対となっている。これも苟庵の教訓を採録した稿本であることは間違いないだろう。

苟庵の聞書と東洲の序文については、わずかながら市島春城が言及している。春城は、「私の蔵書の中に『茂園残話』と『茂園刺話』という写本がある。各四冊で、日本の歴史に関する挿話をあつめたもの」であると述べた後、「茂園残話」の首端に竹院長川熙の自筆の序が収められている。（中略）東洲は其序の中に石橋の著書を挙げてゐる。曰く「枇糠録」十巻、曰く「聞記」「統閣記」各四巻、曰く「省記」四巻、曰く「西清輿地誌略」一卷⁹⁾」であると記している。十巻という量から考えると、『枇糠録』に『邇言録』が含まれていたのかもしれない。しかしながらこの序文は、現存する『茂園残話』（石川武美記念図書館）には見られない。同書には旧蔵者である徳富蘇峰の識語¹⁰⁾が記されるのみである。春城旧蔵本と蘇峰旧

蔵本とは別本である可能性も否定できないが、春城は現存不明の『茂園刺話』と混同したのではないだろうか。これらについては、実際に東洲の序文や『枇糠録』『邇言録』を目にする機会を待ちたい。なお、「残話」「刺話」とあるように、これらは苟庵が桜痴の長崎出立後に脱稿し、送った書物であることが、安政六年七月二十五日付の桜痴宛て苟庵書簡に記されている。

都築御帰便に相送り候、茂園残話も相届き被見致され候よし。右二ハ老のくり言も多かれど、聊か知識を索むる一助にも可相成と存候也。(中略)先達而申遣候、茂園刺話四冊、藩東甫詩一冊、冬菓詞鈔一冊、老の慰みに書写致し候を差遣し申候^⑫

また、春城の随筆にも見える『省記』についての詳細は、福地桜痴筆『星泓雜著』に載録された自序によって、知ることができる。

省記自叙

余之在膝下也、承歛之餘、家尊必有所語。随聞随録、積至八卷。名之闡記。既而出養於名邨氏、職為象胥、乃日往復於出島之館。時或便路、帰謁家尊、省其温清。至則家尊有所語者、如前日也。只恨官事勿忙、不得久侍于側、而所聞亦不能多也。雖然、写録積日、亦得四卷、因名曰省記。

「苟庵と暮らしていた時に、聞書したものが八巻の『闡記』である。それは名村氏の養子となった後も続き、通辞の仕事に随従して出島に往復する時などに、自宅へ寄っては、父の様子を省み、以前の通り話を聞いた。とはいえ、仕事が忙しく、父の側に長く居られなくなつたため、多くの話を聞くことができなかった。しかし、日を重ねることで、父からの聞書は四巻になった。これを『省記』と名付ける。」

桜痴が養子に入った後にも、父からの教誨は続き、それは『省記』と

して『闡記』の次にまとめられたことが、この序文に記されている。これらの記述などから、苟庵の聞書は『耳食録』『邇言録』『枇糠録』『闡記』『続闡記』『省記』『星泓雜著』の順に記されていたと推定される。この内、江戸に上京した安政五年以降にも桜痴が所持していたものは、「日新舎蔵本」印を有する資料である。

日新舎は明治二年頃、桜痴が湯島に開いた英仏塾であり、塾頭は中江兆民であった。この頃桜痴は遊廓に足繁く通い、塾の運営には熱心でなかつたため英語を学ぶ生徒が減り、仏語を主とした塾に変わつていたが、ともかくもこの印は上京後、桜痴が所有していたことを証明するものである。

確認されている苟庵の聞書の内、日新舎の印が捺されているものは『闡記』『続闡記』『星泓雜著』である。日本近代文学館所蔵の『耳食録』には捺されていない。『耳食録』袋書には、「耳食録四冊 福地桜痴十歳之時に書きしもの。此の書物は厨川白村君の家に伝わりしを大正七年十月白村君より小生に贈られたる 福地信世識」と記されており、『耳食録』は福地家に伝わつていなかったためである。桜痴の実子である信世に譲渡されたのは、厨川白村の妻と、信世の妻が姉妹であったことが関係している^⑬。

また、白村の実父源甫^⑭は、先に苟庵の六女余詩と結婚、桜痴の義兄となつていた人物であり、福地家との縁もあった^⑮。江戸にいる桜痴に宛てた苟庵の書簡(安政六年七月二十五日付)^⑯には、英語の通訳として諸方で働き、福地家の家計を助けていた源甫の事が記されている。

源甫事、頃日米人江和語を教へに崇福寺中、竹林庵に時々参り申候。米より一日百疋位の料を申給候よし二而、追々ハ米人の謝物を以而米にても売へきとの心カケニて、家事の事にも心かけ候(中略)且、当地にて治療も致し度由。少々御病人もありて源甫通弁をも間に合

せ候よし也。是二付而ハ、医事の一徳なるへき事と存候。

桜痴が去った後の福地家を支えた源甫であったが、慶応三年秋頃には、「源甫事姉と離縁いたし福地氏之姓を返たる」と福地家を去っていた。なお、広瀬旭荘の子林外は、同年十月四日に箱根でイギリス人ラウダー及び「福地幸庵」と邂逅している。林外は、嘗て長崎でラウダーの元を訪れたことがあったが、その時、通訳をしていたのが幸庵であった。そして十一月九日には、幸庵を訪ねて横浜居留地の英国公使館へ向い、居留地見学の便を図って貰っている。その時幸庵は自分について「贅於崎陽福地氏。今変姓名。曰厨川織部」と語っている。長崎で英語の通訳をし、福地家の入り婿であったこと、今は厨川と名乗っていることなどを考慮すると、幸庵は桜痴の義兄であった源甫とみて間違いない。源甫は離縁後すぐに通訳の伝手を頼って横浜に向かい、英国公使館に勤務していたことになる。源甫は上京の際、桜痴が長崎に残した『耳食録』を、桜痴に届けようと携えて行ったのかもしれない。失われることなく、厨川家に伝わった『耳食録』は、桜痴の没後、福地家に譲渡された。日新舎の印が捺されていない理由は、以上のような経緯によると考えられる。次章では、『耳食録』とは異なり、桜痴が手元に置いていた『蘭記』『続蘭記』『星泓雜著』を中心に、苟庵の見解を探りつつ、桜痴の「文学」観に対する影響について考察したい。

2 苟庵の教訓と桜痴への影響

苟庵は「文学」についても、桜痴に教誨を残している。どのような文章を書くべきであり、何を読むべきか、その基準は明確に示されている。苟庵は、「文章ハ先趣向ヲ熟シテ書取ベキ工夫スベシ。趣向熟セサル内ハ、筆ヲ立ルハ是又大ナルムダ事ナリ」(『続蘭記』卷三)と、書きながら考えるのではなく、考えがまとまったところで紙に向かうべきだと主

張する。これは、一度筆を採ると、談話中にも一気呵成に書き上げた桜痴の執筆スタイルに合致する。桜痴は、「君達が書きつゝ考へると、僕が不断考へて置いて、熟してから書くのと、時間は同じことだよ」と速筆の秘訣を尋ねた記者に答えており、信世も同じ「癖」があるとして、「これは福地家の家伝かも知れない」と述べている。苟庵の教えが桜痴、そして孫の信世にまで引き継がれるほど、その身に浸透していたといえよう。

また語句について苟庵は、「今世ノ俗書翰ニ、間違ヒノコト多シ。中ニモ然者、左様ナト、文法甚タ違ヘリ。然レトモ俗ヲ成シ来レルコトハ、通用ト成テ改ムルヘキニアラス」(『蘭記』卷二)とし、語彙の正確な用法ではなく、世間で通用する語彙かを重視している。桜痴もまた、「文章ヲツヅルニ当テ、漢語ニテモ洋語ニテモ、已ニ吾邦一般ニ通ズルノ言語トナリタルモノハ、敢テ斥ケザルモ妨ゲズ」(『東京日日新聞』明治十四年五月二十四日)と、使用言語の如何に拠らず、通用するかどうかを基準として文章を記すように述べている。このように、苟庵の通用という基準は、桜痴に引き継がれ、「達意」の文章を重視する論が展開されていく。

桜痴は、「我曹ガ日用ニ書スル所ノ文章ハ、難易ト簡煩トテ論ゼズ、以テ意ヲ達スベク、以テ之ヲ述ブベキ」(『東京日日新聞』明治七年十二月二日)であり、西洋諸国の文章と比較すると、達意の程度の差が著しいと述べている。長崎ではオランダ語を学び、のちに英語を専門としていた桜痴は、四度の洋行をし、『那破倫兵法』(慶応三年)や『外国事務』(明治一年)、『英国商法』(明治三年)などの翻訳も手掛けていた。これらの経験から西洋の言語、特に英語文と日本語文との間に、達意の差を実感するに至ったのだろう。

その後も、「全文ノ結構ハ英。使用ノ語辭ハ漢。而シテ接続ノ文法ハ

日本」といふ昨今の、複雑かつ難解で、伝達事項・内容が伝わりにくいと漢洋混淆文に対して、その原因を「達意ノ目的ヲ充分スルニ足ルベキカラ知ラザレバナリ」〔東京日日新聞〕明治八年八月二十九日と断じ、読む者に混乱を招く鶴文を解消するためには、「達意」の視点から文章を作成すべきであると改めて主張する。

また、「達意」の点から「古文」についても触れ、「支那人ノ古文ニ於ケル、欧米人ノ希臘、羅甸文ニ於ケル如ク、是レ死文章ナリ。活文章ニ非ラズ」〔東京日日新聞〕明治十四年五月二十三日と、外国にも不適當な文章があると指摘する。ラテン語と通用言語とを区分するという考へは、既に荷庵からも聞かされていた。

羅甸語ト称スルハ、訳シテ言ハハ雅語ナリ。彼州ニモ雅俗ノ両語アリ。今ハ專ハラ俗語通用ナリ。
〔統闡記〕卷三

荷庵はラテン語が現在一般的ではない言葉であると指摘するのみであるが、桜痴は更に踏み込み、「死文章」であると見做した。これは、一般に通じるかどうかを基準として、執筆せよという荷庵の説諭を、推し進めた意見である。家庭教育の影響を感じさせるものであるといえよう。また、荷庵は書物に対して、知識獲得のために有益か否かを最も重要視していた。

書ヲ看ルハ只自己ノ智ヲ益シタメナルニ、無益ノ戯作本ヲ読テ、光陰ヲ費シ燈火ヲ費スコト、智者ノスマシキコトナリ、智者ノ看ル書ハ、和漢ニ拘ハラズ、皆読テ益アル書ヲ看ル、愚者ノ看ル書ハ戯作本ノ類、損アツテ益ナキ書ヲ看ル、故ニ智者ハ益々智ニシテ、愚者ハ益々愚ナリ。
〔闡記〕卷一

近世ノ詩文ハ、唯遊戯ノ一事ニテ、実ハ無用ノ業ナレトモ、蹴鞠、囲碁ニハ優ルヘシ。凡百ノ事、文ニ有サレハ意ヲ達スルコト能ハス。

詩モ鳥獸草木ノ名ニ多識ナルタケノ益ハアルヘシ。行余力アラハ学ヒテモ損ハナカルヘシ。
〔闡記〕卷一

唐山ノ稗史ハ、戯作ナレトモ見テ益ナキニアラス、日本ノ稗史ハ、見テ害アレドモ、益ハ決シテナキモノナリ。
〔闡記〕卷三

国学者ハ古史ヲ讀ムコト第一タルヘキヲ、和歌ノ学ヲ修セントテ、源氏伊勢ノ物語ヲ研究ス。此二書文筆ノ妙ハ慕フベケレトモ、畢竟淫蕩ノ事ニテ、皆稗史ノ類ナリ。清少納言ノ著ハセシ枕草紙ハ、二書ト違ヒテ大ニ益アル書ナリ。清少納言ハ和漢ノ学者ニテ、其卓識傑出セル人ナリ。其氣象決シテ粉黛ノ臭ナキナリ。
〔統闡記〕卷四

元禄頃の人の著述に合類節用ト云書あり。俗なる書なれとも必用の事多し。書舖にて求メらるへし。十二円程なり。和漢名数解の如なるもの也。甚徳用多し。貝原の和爾雅なども座右のあるべき書也。
(安政六年十二月二十四日荷庵筆桜痴宛書簡 日本近代文学館蔵)

荷庵にとって読書は、第一に知識を得るために行うものであった。読むべき書として節用集などの実用書を挙げている。また、詩でさえも『論語』(陽貨)の言葉をふまえ、知識の獲得を基準に評価している。また、中国の『五雜俎』や『聊齋志異』などの漢籍はまだしも、日本の戯作や稗史は読書の意味がないと断言する。有益な書物を読むべきであるという荷庵の説は、十歳の桜痴に向けた教誨書『耳食録』にも記されている。

家大人曰、稗史説部ヲ讀ミ、演義説部ヲ觀ルモ、勸善善行ヲ示シ、懲惡惡行ヲ戒ムコト益ナキニアラス。然レトモ正史ヲ識サル人ハ、動モスレハ実跡ト心得之ヲ、以テ治乱興廢ヲ論ス。聴者捧腹ニ堪サル事多シ。
〔耳食録〕卷二

苟庵にとつて物語や芝居本とは、内容や構成を楽しみ、人情の機微に思いを馳せるためのものではなく、勸善懲惡の知識獲得に役立つ可能性があるという点で、わずかに読む価値を見出せるものであった。作品からどのような知識を獲得できるのか、その点で有益か否か、を一貫した基準として読書を行うように教育されていた桜痴が、知識から離れた情景豊かな作品を描くことを不得手としていたのも、深く関係しているのではないだろうか。

『東京日日新聞』の社説や小説、また歌舞伎座の脚本などを執筆していた桜痴であったが、特に劇作の情景描写については不足が指摘されてきた。桜痴は劇作を始める際、近松門左衛門や近松半二などの院本を集め、読破していた⁽²⁵⁾。特に近松門左衛門作品は「出世景清」など四点の翻案ものがある。しかしながら、何れも近松の世話物ではなく、時代物である。富倉二郎は、「原作の荒唐無稽の点を去り淫靡な点を除きこれに史劇の骨を著せたもので、いはゞ合理的史劇化であり、そこには近松の持つ詩味、機微なる人情は寧ろ殺されてしまつてゐると云つていゝ、」(富倉二郎「狂言作者福地桜痴」『京都帝国大学国文学会二十五周年記念論文集』星野書店 昭和九年)と批評しており、桜痴の心情描写の稚拙さが指摘されている。

桜痴の戯作について、卓抜な分析を行つてきたのは、坪内逍遙だろう。「我が国の史劇」(『早稲田文学』明治二十六年十月、明治二十七年四月)において逍遙は、次のように述べている。桜痴史劇では「作家の冷観」「暗刺(アイロニー)」といわれる表現技法、すなわち人々が普段黙殺している心理を暴露し、観客の動揺を誘う描写や、本心とは逆の皮肉な所作といった表現技法が欠けている、と。加えて、登場人物の多くが先を見通して、適切な判断を下し、輝かしい未来へと進む能力に長けた「先見明察」の人物ばかりであるため、観客は既視感を生む桜痴の史劇に倦

んでいると断じている。その理由について、逍遙は「新写實的史劇」を求めた「時の精神の反映なれば、予は強にこれが為に居士の作を難せんとはせず」と述べている。歌舞伎の地位向上を目指した演劇改良運動等が盛んな時代の求めに応じた結果であると見做した逍遙は、人物描写を中心とした近松の「夢幻的史劇」や黙阿弥の「写實的世話物」と桜痴史劇は、そもそも理念が異なるとして、同列に批評を行う無意味さを指摘している。

しかしながら桜痴自身、自分には脚本や小説を書くために必要な「詩想」がなく、「深い観念も、高尚な思想も、一種の味ひ」もないという難点を認識していた⁽²⁶⁾。近松や黙阿弥のような作品を書かないのではなく、書けないのだとする桜痴の言葉には、確かに逍遙の指摘する時代の影響も看過できないが、叙情を閑却し、知識のみを読書の基準とする苟庵の教誨に従つていた結果なのではないだろうか。苟庵の家庭教育こそが桜痴の創作を「新写實的史劇」に制限してきたといえよう。

3 戯作者との付き合い

桜痴が情景描写に秀でていないことは、自他共に認めるところであったが、桜痴は「文学」論において情景描写に高い価値を見出していた。ここに父からの教訓の踏襲に留まらない、桜痴独自の「文学」観の展開を見ることができよう。そして桜痴は、左記の論説に見えるように、情景描写に秀で、作者の思考表現に合致し、読者にもそれが通じ易い「達意」の文学とは、苟庵が否定した戯作等の(俗文学)であると結論付けた。

景状を画き、情意を写すの細密なるより、読書をして喜怒哀の感を発せしむる文章の妙処に至りてハ、小説を以て文学の魁首と成すべきに於てをや。此小説の文学ハ日本に於て盛なりき、彼の竹取、栄花、伊勢、源氏、狭衣等の物語ものハ古文にて、今日の世間に通用せぬ

としても、近きころ山東京伝なるもの世に出てより、馬琴、種彦、一九等引続きて起り、降りて春水、有人、魯文の諸人あるに及べり(中略)此作家等が冥々の中に於て文学に功勞あるハ、敢て歴史家の学者に劣らず、只日本の風習の爲めに下等に位せられたるこそ是非なけれ。

〔東京日日新聞〕明治八年四月二十六日)

吾曹ハ洋書ヲ讀ム毎ニ、其ノ文章ノ達意ニ長スルヲ感ジ(中略)吾曹ハ毎ニ曰フ、日本ノ四大奇書トモ称スベキ大文字ハ、馬琴ノ八犬伝、種彦ノ田舎源氏、一九ノ膝栗毛、春水ノ梅曆ナリト。比四書ハ(正理道德ニ背クト否トヲ措キ)、皆ヨク細微ノ情意ヲ写シ尽シテ余蘊ナク、読者ヲシテ喜怒哀樂ノ感ヲ發セシムルニ於テ、更ニ欧米支那ノ作者ニ一歩ヲ讓ラザルベシ。

〔東京日日新聞〕明治八年八月二十九日)

其文体の如何を問はず専ら通俗を旨とし、誰にも了解し易くして、其意味を誤解する事の患なきを第一に心掛け、次には文体上の礼節を失はざる様にとは心掛たり。

〔國民之友〕明治二十六年十月十三日)

曲亭馬琴や柳亭種彦、十返舎一九、為永春水、山々亭有人、仮名垣魯文などは、不当に低い地位が与えられている。しかし、彼らの戯作には、情景を描写し、喜怒哀樂の感情を引き起こすような「文章の妙処」があり、作者の思考を余すところなく伝える「達意」の文章で綴られている。このように語る桜痴は、更はその「達意」において(俗文学)が、西洋や中国の文学にも匹敵すると付け加える。外遊経験者で知られた桜痴のこの言葉には、低く見られてきた(俗文学)に箔を付けるものであった。

桜痴が長年聞かされてきた苟庵の教誨、則ち「達意」の文章と作品の「有

益」性を、苟庵が否定した(俗文学)に見出したことは、偶然ではあるまい。

坂本多加雄は、桜痴が(俗文学)に目を向けたのは、『江湖新聞』発行の際の協力者であった山々亭有人や、広岡幸助、西岡伝助などと交遊をもっていたからであり、彼らを通して戯作者との交流も生まれたとしている。そして、統治階級の出身ではない彼らの記す戯作が、政治的価値とも無縁だからといって、「無用」なものと断じてよいのか。そのような疑問が桜痴に生じ、また同じ(俗文学)の範疇にあると見做されていた新聞記者となるにあたっては自己弁護のため、啓蒙的姿勢を以てその「有用性」を説いたと述べる。桜痴が自己の「有用性」を政界から文芸界に移行させた説は首肯できる。

その上で、(俗文学)の世界に興味を抱いたきっかけを掘り下げると、『江湖新聞』のみではないことを指摘したい。先述した明治八年四月二十六日の社説を見ると、有人と魯文の名前が記されていることに気が付く。四大奇書の執筆者とはいかないまでも、桜痴の中で有人と魯文は、戯作者として先ず思い当たる人物だった。彼らは共に暮らし、共に仕事をし、共に遊んだ仲であり、作中にも桜痴の名前を挙げるような関係を築いていたからである。

安政五年末に上京してきた桜痴は、安政六年四月から小石川金剛寺坂上にある英通詞森山多吉郎の塾に落ち着いた。ここで英語を学んだ桜痴は、幕府御雇通詞として神奈川運上所などを往復する日々が始まるのだが、この頃、桜痴と魯文、そして有人の三人は、「妻恋坂」に住んでいたことがあるという。この場所は、嘉永六年の夏から、文久二年の春までの九年半、魯文が住んでいた野狐庵を指しており、魯文は既に戯作者として生計を立てていた。この場所に桜痴が居たとすれば、江戸で生活を始めた安政六年正月から渡欧する文久元年十二月までの、三年の間で

ある。桜痴の住居が記された『仕途日記』⁽²⁰⁾には、妻恋坂の地名は見えないため、定住した場所ではないにせよ、彼らが非常に親しい付き合いをしていたことがわかる。また、魯文の『西洋道中膝栗毛』九編上口絵(明治四年)には、慶応三年秋に桜痴から来た書簡が掲載されている。そこには読み終わった本を返却するついでに、また数冊貸して欲しいという要望や、秋の夜長の徒然に來訪を誘う文面が記されており、友人同士の気軽さがうかがえる。

慶応四年閏四月から桜痴は、山々亭有人等の手を借りて『江湖新聞』を発行するも、筆禍事件を起こし、同年五月二十二日の第二十二号を以て廃刊する。その後、徳川家の臣下が駿府に引き移るに従い、桜痴も転出したが、明治元年暮に帰京する。居を定めたのは、浅草馬道寝釈迦堂の傍らにあるいろは長屋であった。⁽²¹⁾この真向かいには、魯文が前年から住んでおり、それを念頭においた上での移転だろう。翌明治二年頃には新堀留の権念寺で英語教授の出張所を設け、その「受附なり会計なり魯文に山々亭有人」⁽²²⁾を雇っている。程なくして天神下旧旗下久松の屋敷で日新舎を開いた。明治三年から六年にかけて桜痴は諸外国を廻っていたため、明治七年に『東京日日新聞』に山々亭有人の誘いで入社するまで、彼等と表立った交流は見られない。

しかしこの間にも、先の『西洋道中膝栗毛』と同様、魯文や有人の作中には桜痴の姿がしばしば見られる。例えば、魯文の『雑話安愚楽鍋』三編上(明治五年序)にある「商法個の胸会計」⁽²³⁾には、「福地先生なんぞハ古臭いのが可といハツしやるが素人口じやア屠て二日目あたりが最上ダネ」と、貿易商人の牛肉談義中に、牛肉を食べ慣れている開化の人物として、桜痴が例に出されている。また、山々亭有人も、『行流英語都々逸』(明治四年)に「なんぼ浮世が逆さまぢやとて客が飯(*右に「False」以下同)つき女郎を騙(「Cheat!)」と、う桜痴を詠んだ都々逸を掲げ

ている。これは内藤新宿の馴染みの遊女に、同伴した新婚の妻を、妹だと偽って騙した逸話がもとになっている。⁽²⁴⁾ちょうど桜痴が政府の一員として渡航している時期に、魯文と有人が桜痴に触れているのは、彼等なりの饒か、宣伝効果を狙った作戦だろう。ともかくも、桜痴が両者と友好的な関係を結んでいたことが、これらの戯作にも現れているのは間違いない。

また、明治九年には新聞記事上で、魯文と桜痴の応酬があった。魯文が編集する『仮名読新聞』九月六日に、吉原芸者増田お半の手練手管と悪女振りが記事となった。ところが、期限までに取り消し記事を出さなければ、名誉毀損の讒謗律によって訴えるというお半からの手紙が届き、魯文は訂正文を九月十三日に掲載する。ここには、お半の手紙が転載されているが、魯文は、たとえ「事実候とも」名誉を傷つけられた事には変わりはない、という事実云々の部分に傍点を付し、訂正を強いられた鬱憤を僅かばかり晴らしている。讒謗律を持ち出し、謝罪文の期限を定めたこの手紙を代筆したのが、桜痴であった。⁽²⁵⁾『三才人遺墨』(早稲田大学図書館蔵)と題された軸には、この時の書簡と、魯文と落合芳幾の追補が貼られている。魯文は「福地桜痴先生、花街の猫妓半女が代筆して余を苦しめられしも、はや十五年の昔とはなれり」としたためしており、昔日の友情を懐かしんだこの識語から、お半の書状が、それと署名はないものの、桜痴の手を経たものであったことを、当時の魯文が認識していたことがわかる。一見、緊張感のあるこの攻防も、互いの手の内を知った者同士で交わされる、戯れ半分の応酬であったといえよう。さらに有人も、桜痴と縁が切れてはいなかった。明治十九年から有人は『やまと新聞』を発行し、そこで『レ・ミゼラブル』や『オセロ』『リア王』などの翻案小説を手掛けるが、「大和新聞の小説は大抵桜痴先生が翻訳して父が潤色したものでした」という実子、鍋木清方の証言があ

る。また明治二十一年、桜痴が東京府第三観工場の土地を歌舞伎座設立のために購入する際、條野伝平（有人）名義で土地払下げを出願しており、依然、長い付き合いが続いていたことがわかる。

父苟庵は、「智者ハ必ス益友ヲ友トス。故ニ一談一話ニモ、常ニ益ヲ得ルコト多シ、愚者ハ必ス損友ヲ友トス」（『聞記』巻二）と説いていた。上京直後からの友人である有人や魯文は戯作者であり、世間一般の尺度に照らせば、「益友」というよりむしろ「損友」に属する人々であった。桜痴は彼らとの交流で得た見識と、最新の海外知識を組み合わせることで、友人たちを「有用」の「益友」であると評価することが可能な「文学」観の基準を構築した。それが、『東京日日新聞』等に記された〈俗文学〉の「有益」性の提示であったのだろう。

まとめ

嘉永三年頃から苟庵は、桜痴に向けて様々な教訓を残しており、それは安政五年に上京するまで続いていた。現存が確認できる聞書の内、『聞記』『続聞記』『星泓雜著』は、後年も桜痴が手元に置いていた資料である。その中で苟庵は、世間一般に通用する語彙を用いて文章を記し、「有益」な知識を得ることができると述べている。「有益」な会話が交わされる友人を持つべきであると説いている。「有益」を基準とした苟庵の教訓は、後年、桜痴が提示する「達意」の文章論へとつながり、〈俗文学〉の「有益」性を見出すに至った。

ただし、戯作有益説は、苟庵の戯作無益説への抵抗であり、「交友ノ道ハ宜シク淡泊ナルベシ」（『続聞記』巻三）という苟庵の教えに背き、戯作者と親交を深めていた桜痴の自己弁護から出発したものである可能性が否定できない。

桜痴はその後、戯作と同じく「下等」とされてきた歌舞伎の地位向上

のため、演劇改良運動を牽引し、戯曲や翻案、小説等の〈俗文学〉に自ら筆を採り始める。これは、「達意」を〈俗文学〉に求めた己の理論の実践であった。しかし、苟庵の教訓に従った知識偏重の読書は、桜痴の作品を余情の乏しいものに制限していた。

「其磧西鶴等が著したる小説戯作の如き通俗の文章にて言ふ可からざるの妙味に富めるに非ずや」としながらも、「西鶴物」を嫌い、「総て元禄風といふ字の数を勘定して書く様に往詰つた文章では到底一部の纏つた大著は書けぬ。（中略）文章も彼処へ墜ちては外道だ」と公言していた桜痴は、西鶴の「妙味」のひとつである「ぬけ」のある文章を否定した。筆者の意中を余すところなく伝えようとする「達意」の文章を志向した桜痴らしいが、余情を省いた結果、「桜痴居士の史劇といふものに、心の底に怒りを懐いた」山崎紫紅などを生み、史実に拘泥しない次世代の劇作家や小説家の台頭を促していく。

後発の世代を苛立たせたのは、桜痴の議論に残響する苟庵の説諭の声だったのかもしれない。しかし、それは桜痴にとって反発を覚えながらも、懐かしく思い出されるものだったのだろう。

注

- (1) 坂本多加雄「福地桜痴と明治維新」『学習院大学法学部研究年報』昭和五十九年三月、山田俊治「福地桜痴の「文」学」『アジア遊学』平成二十五年三月
- (2) 「桜痴居士の記念」『早稲田文学』明治三十九年二月
- (3) 福地桜痴「石橋先生伝」『東京日日新聞』明治十七年六月二十八・三十日
- (4) 「福地桜痴と明治維新」前出
- (5) 一人は早世。『福地信世』私家版 昭和十八年

- (6) 拙稿「長崎人、福地桜痴の上京——苟庵の書簡から——」『立教大学日本文学』平成二十五年一月
- (7) 「児萬世官在江都今冬^時奉命隨從公使於泰西六国懷而有此作」『茂園詩草』(文久元年頃 早稲田大学図書館蔵)
- (8) 桜痴の帰国は文久二年十一月中旬(「懷往事談」第十回『国民之友』明治二十六年五月)
- (9) 市島春城『春城漫筆』早稲田大学出版部 昭和四年
- (10) 「予未詳著者何人但卷中多関于国史記事評論不失一讀之価値耳 大正丙辰紀元節朝 蘇峯生」
- (11) 『茂園残話』については、亀田一邦『幕末防長儒医の研究』知泉書館 平成十八年に詳しい。
- (12) 日本近代文学館蔵
- (13) 幸徳秋水「兆民先生」博文館 明治三十五年。なお、東京府下私塾の生徒数を記した『新聞雑誌』(明治四年六月)の記事にも、「仏学 福地源一郎 同七十八名」とあり、日新舎は仏学塾と認識されていた。
- (14) 信世の妻つたと、白村の妻てふは、桜痴の姉よしと源甫の孫に当たる。『福地信世』前出。
- (15) 柳田泉『福地桜痴』(吉川弘文館 昭和六十四年)では「源輔」となっているが、桜痴自筆稿本の『仕途日記』(明治元年成立 日本近代文学館蔵)では「源甫」で統一されている。
- (16) 福地桜痴自筆稿本『十二重福地萬世著 皇朝二十四孝伝 全』(嘉永五年成立 日本近代文学館蔵)の袋書には、「この書伝へて厨川白村之家にあり、白村君之父 源甫君は父君の義兄なれば又、大正六年十一月白村君これを予に贈らる。福地信世識」とある。なお、本書にも「日新舎蔵本」の印は見られない。
- (17) 日本近代文学館蔵
- (18) 『仕途日記』前出
- (19) 広瀬林外「入関録」『林外遺稿』巻四 田島勝太郎 昭和三年
- (20) 広瀬林外「異聞録」巻上『林外遺稿』巻六 田島勝太郎 昭和三年
- (21) 梅原龍北「雲煙過眼」宝文館 明治四十年
- (22) 「作家苦心談」『新著月刊』明治三十年十二月
- (23) 福地信世「米の飯の味 父桜痴に関する座談」『読売新聞』大正十四年八月二十四日
- (24) 『続聞記』巻四
- (25) 柳田泉『福地桜痴』『福地桜痴集』筑摩書房 昭和四十一年
- (26) 「作家苦心談」前出
- (27) 坂本多加雄「福地桜痴と明治維新」前出
- (28) 塚原涉柿園「桜痴先生のこと」『東京日日新聞』明治四十二年三月二十九日
- (29) 拙稿「野狐庵魯文と稲荷」『朱』伏見稲荷大社 平成二十三年十二月
- (30) 前出。明治元年までの移転先が記されている。
- (31) 榎本破笠「桜痴居士と市川団十郎」国光社 明治三十六年
- (32) 『桜痴居士と市川団十郎』前出
- (33) 『桜痴居士と市川団十郎』前出。拙稿「山々亭有人」『流行英語都々逸』の周辺)『立教大学日本文学』平成二十二年十二月
- (34) 市島春城「明治初頭の新聞回顧」『明治文学回想集』上 十川信介編 岩波書店 平成十年にも記載あり。
- (35) 鍋木清方「條野採菊翁」『東京日日新聞』明治四十二年三月二十九日。土谷桃子「江戸と明治を生きた戯作者 山々亭有人・条

野採菊散人」近代文芸社 平成二十一年

- (36) 巖谷眞一「歌舞伎座物語」『歌舞伎座』歌舞伎座出版部 昭和二十六年

(37) 『国民之友』明治二十六年十月十三日

(38) 塚原靖「桜痴居士の紀念」『早稲田文学』明治三十九年二月

- (39) 山崎紫紅「跋」『現代戯曲全集』第三卷 国民図書株式会社 大正十四年

*引用文中の傍線、句読点などは適宜論者が加筆し、ルビは適宜省略した。本稿は立教大学日本文学第五十二回研究会での発表を基としている。同会で御教示を賜った各位に深謝申し上げる。また本稿は、科研究費若手研究B「福地桜痴を中心とした幕末明治の文芸に関する総合的研究」(課題番号一四七二〇一一九)の成果の一部である。

(にわみさと 本学兼任講師)